

令和 5 年 10 月 2 日現在

機関番号：32423

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01568

研究課題名（和文）知的障害のある人の性をめぐる社会的実態と性教育のあり方に関する研究

研究課題名（英文）A study on the social realities surrounding sexuality and the practical sexuality education for persons with intellectual disabilities

研究代表者

河東田 博（Katoda, Hiroshi）

浦和大学・社会学部・教授

研究者番号：80258318

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、5課題（1：性をめぐる歴史的・社会的・構造的実態、2：就労の場における性教育実施の実態、3：性に関する認知・理解の実態、4：性教育プログラムの開発、5：性のノーマライゼーション化の検討）解明へのアプローチを行った。

研究結果を踏まえ、性のノーマライゼーション化を図るために、「知的障害のある人のための社会・性的包括支援モデル」を提示した。公的支援を導入しながら、わかりやすく「性と対人関係」に関する情報を伝え（「機能性」）、「個別支援」や「心理的前提条件」「地域住民の理解」を得ていくことで、性のノーマライゼーション化も性的共生社会の創造も可能になると結論づけることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

性をタブー視する社会的風潮や知的障害のある人の性に対する偏ったイメージ、性に目覚めないでほしいという親の意識などが関係し、これまで知的障害のある人の性に関する研究も実践も十分になされなかった。本研究では、知的障害のある人の性に対する歴史的・社会的対応を構造的に明らかにし、就労の場で性教育がどの位行われているのか、知的障害のある人が性に関する情報をどのように入手し、どの程度認知・理解しているのか、その実態を明らかにしながら、就労の場における性教育実践への方途を実際的に解明しようとした。その結果、本研究は、理論的に深められ、性教育実践にも役立つ、学術的価値と社会的意義が成果として得られた。

研究成果の概要（英文）：In this study issues toward the creative normalization on sexuality for persons with intellectual disabilities were discussed.

Results from the study were discussed that we must realize a social system in cooperation with lifelong education on sexuality education and improve the quality of sexual life by intervening in the environment, by respecting their independence, compensating for functional limitations and offering individualized assistance in accordance with their hopes and desires while at the same time fostering understanding in the community around them. Results from the study were also discussed that the creative normalization and inclusion on sexuality will become possible, if a comprehensive public assistance will be introduced

研究分野：障害者福祉

キーワード：知的障害 性 社会構築 就労支援事業所 性に関する認知・理解 性的生活の質 性のノーマライゼーション化 性的共生

1. 研究開始当初の背景

申請者は、知的障害のある人の性に関する研究や性教育実践を50年近くにわたって行い、それなりの積み重ねができてきてはいるものの、体系だった整理が十分になされなかった。知的障害のある人の性に関する研究や性教育実践が続けられ、研究準備体制が整っているこの機会に、本研究を通して知的障害のある人の性をめぐる社会的実態を整理し、知的障害のある人の性教育の体系化を目指したいと考えたのが研究開始当初の背景である。

国内外で知的障害のある人の性に関する様々な研究・教育活動がなされてきているものの、未だ体系的な研究・教育活動とはなり得ていないため、理論的・実践的かつ体系的な研究を行うことには大きな意義があり、関係者の協力を得ながら、研究課題の解明に努力をしていきたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、次の5点を明らかにすることを目的とした。

- (1) 知的障害のある人の性は、歴史的・社会的にどのように扱われてきたのか。
- (2) 親や教育・福祉関係者は、知的障害のある人にどのような教育的対応を行ってきたのか。
- (3) 知的障害のある人は、性に関する情報をどの程度認知・理解しているのか。
- (4) 知的障害のある人に性教育を行う際、どのような内容を用意し、どのような方法で行っていったらよいのか。
- (5) 知的障害のある人の性のノーマライゼーション化を図るには、今後どのように社会的環境を整えていったらよいのか。

上記目的を達成するために、知的障害のある人への歴史的・社会的対応を社会構造的に明らかにし、学校や学校卒業後の社会/職場で性に関する教育がどの位行われているのか、知的障害のある人が性に関する情報をどの程度認知・理解しているのか、その実態を明らかにしながら、学校や学校卒業後の社会/職場で今後どのように性教育を行っていったらよいのか、という問いに答えるために、次のような五つの課題を設定した。

- 課題1：知的障害のある人の性をめぐる実態は、歴史的・社会的・構造的にどうなっているのか。
- 課題2：親や教育・福祉関係者は、知的障害のある人に、どのような性に関する内容を、どの位の頻度で提供し、どのように行っているのか。
- 課題3：知的障害のある人は、性に関する内容を、どの程度、どのように認知・理解しているのか。
- 課題4：知的障害のある人に性教育を行う際、どのような内容を、どの位の頻度で、どのように行っていったらよいのか。
- 課題5：知的障害のある人の性のノーマライゼーション化を図るためには、どのように社会的環境を整えていったらよいのか。

3. 研究の方法

本研究遂行にあたり、2019年4月24日、浦和大学・浦和大学短期大学部調査倫理審査規程に基づき、調査倫理審査委員会に「研究倫理審査申請書」を提出した。2019年5月23日、調査倫理審査委員会より「承認」の判定結果を受理し、研究に着手した。まず、調査対象者が所属する各社会福祉法人との間で「業務委託契約」を交わし、調査対象者本人や保護者から書面で了解を得て性に関する認知・理解度調査や「性に関する講座」を実施した。また、研究結果の公表に関しても、同様の手続きを行った。

その上で、上記五つの課題を様々な視点から検討し、明らかにするために、以下のような方法で研究を行った。

課題1を明らかにするために、国内外の先行研究の分析と情報収集・現地調査を行った。

課題2を明らかにするために、全国の教育・福祉関係機関(教育機関は主に高等部をもつ特別支援学校、福祉関係機関は就労移行支援事業所・就労継続支援支援A型事業所・就労継続支援B型事業所のいずれかをもつ就労支援事業所)を対象に性教育に関する全国調査を行った。

課題3を明らかにするために、全国3カ所(岩手・長野・長崎)の社会福祉法人傘下の就労支援事業所で支援を受けている知的障害のある人(対象者数:岩手6人:男2人・女4人、長野15人:男8人・女7人、長崎:男10人・女10人)を対象に、性に関する認知・理解度調査を視覚教材を使用して行った。視覚教材は、「健康一般」「衛生」「人間の体」「成長」「性と対人関係」の五つの領域を組み合わせた白黒の絵または写真から成っていた。これらの絵や写真を提示しながら、「この絵/写真は何ですか」という質問を行い、得られた回答を3分類(1, 2, 3)で評価し、認知・理解度を測定した。

課題4を明らかにするために、課題3の調査地3カ所(岩手・長野・長崎)の就労支援事業所の知的障害のある人を対象に、「性に関する講座」を行い、講座終了後、参加者に性に関する認知・理解度を再調査するための効果測定を行った。

課題5を明らかにするために、上述の4課題を再整理すると共に、論点が整理された時点で知的障害のある人を念頭に入れた「性のノーマライゼーション化に関する見解」を示し、調査対象地の岩手・長野・長崎の関係者から個別に意見を聴取した。さらに、東京で行った研究成果発表会(2023年2月24日)や岩手・長野・長崎で行った「性に関する講座」報告に焦点をあてた公開シンポジウム(2023年2月25日)で、「性のノーマライゼーション化に関する見解」に対して広く意見を聴取した。聴取された様々な意見を踏まえ、「性のノーマライゼーション化に関する見解」を修正の上、「性のノーマライゼーション化」を図るためには、どのように社会的環境や組織的体制を整えていったらよいのかをまとめた。

4. 研究成果

本研究では五つの課題を設定し、課題解決のために取り組んできた。以下に示すのは、本研究で立てた課題がどのように整理されたのかの概要と成果である。

課題1「知的障害のある人の性をめぐる実態は、歴史的・社会的・構造的にどうなっているのか」については、文献研究に基づいて整理することができた。

なお、課題2以降の諸課題を整理・分析するために、課題1の中で「性の社会構築モデル」を理論的枠組みとして用意し、「性の社会構築モデルの構造的検討」を行った。

「性の社会構築モデル」では、「性的平等」「性的差別」「性的自由」「性的管理」という四つのキーワードを用意し、縦軸の上方向に「性的平等」、縦軸の下方向に「性的差別」を、横軸の右

方向に「性的自由」・横軸の左方向に「性的管理」を配置してみると、縦軸・横軸に区切られた領域に四つの象限が生まれた。この四つの象限は、社会 - 性的な相互作用の結果生み出される社会と性との関わり合いが示しされており、「 : 性的排除」「 : 性的制約」「 : 性的適応」「 : 性的共生」と表現することができた。しかし、現状は、「性的排除」(第 象限)「性的制約」(第 象限)「性的適応」(第 象限)「性的共生」(第 象限)が順に移行して行くとは限らず、混在しながら象限間を行きつ戻りつしていることがわかった。このような現状を認識した上で、どうしたら第 象限の「性的共生」に向かって歩んで行くことができるのかを検討していく必要があると思われた。

課題2「親や教育・福祉関係者は、知的障害のある人に、どのような性に関する内容を、どの位の頻度で提供し、どのように行っているのか」については、全国の教育・福祉関係機関を対象に行った性教育に関する全国調査で整理することができた。

この全国調査は、2020年2月から3月にかけて、特別支援学校の養護教諭500人(回収率27.0%)と就労支援事業所のサービス管理責任者500人(回収率34.6%)を対象として行ったアンケート調査で、知的障害のある子どもは学校で、知的障害のある人は就労の場で、性への興味・関心を変わず持ち続け、他の人と性的な関係を持つようとしていることが明らかにされた。一方で、「性の問題」に直面した際、ほとんどの特別支援学校で「性教育等」などの対処を行っていたのに対し、就労の場では「支援会議・職員会議を開き、個別に状況を把握し支援」するなどの対処が行われていたものの、「性に関する教育/勉強会」などはほとんどなされていないこと、それは、仕事の間であるため「忙しく」「時間が取れない」ことや「性教育を担当できる職員がいない」「教え方がわからない」という理由からで、性に関する情報を十分に提供していない実態が明らかとなった。

課題3「知的障害のある人は、性に関する内容を、どの程度、どのように認知・理解しているのか」については、五つの領域(「健康一般」「衛生」「人間の体」「成長」「性と対人関係」)を組み合わせた視覚教材を利用し、「この絵/写真は何ですか」という質問に対して得られた回答を得られた回答を分析することで認知・理解度を測定することができた。測定結果を分析した結果、知的障害のある人の性に関する認知・理解には個人差があり、分かりやすい項目と理解困難な項目が共通に見られることが分かった。また、裸の絵や写真のある項目への回答には、恥じらいの様子が見られていた。さらに、認知・理解の程度によって、対象者を三つの理解群(高・中・低)に分けて整理できることも分かった。知的障害のある人の性教育実践は、上記のような結果を念頭に入れながら行っていく必要があると結論づけることができた。

課題4「知的障害のある人に性教育を行う際、どのような内容を、どの位の頻度で、どのように行っていくならよいのか」については、国内外の文献研究に基づき、「目標」「構成要素」を下位項目とした「性教育プログラム：9領域」を作成することができた。この「性教育プログラム：9領域」を念頭に入れながら、岩手・長野・長崎の就労支援事業所の知的障害のある人を対象に、2021年度から2022年度にかけて、約1年間、「性に関する講座」を申請者と協働で実施し、「どのような内容を、どの位の頻度で、どのように行っていくならよいのか」を整理することができた。3事業所における「性に関する講座」の取組みは三者三様だったが、継続的に「性に関する講座」の取組みを行い、参加者の日常的な性の問題に対処できるようにしていくことが必要なことが確認された。さらに、各事業所における「性に関する講座」の取組みが、性的な「制約」や「適応」を強いることのないようにしていくことも確認された。なお、講座終了後効果測定を行い、「性に関する講座」の有効性が確認できた。

課題5「知的障害のある人の性のノーマライゼーション化を図るためには、どのように社会的

環境を整えていったらよいのか」については、各課題の検討結果を基に「性の社会構築モデル」（「性的排除」「性的制約」「性的適応」「性的共生」）に照らし合わせながら整理し、「性的共生社会」をどのように創り、「性のノーマライゼーション化」をどのように図るか、そのために、どのように社会的環境を整えていったらよいのか、を検討した。

「性的共生社会」の創造と「性のノーマライゼーション化」を図るために、まず、「生活の質」の概念を用い、性に関する「生活環境」（「性的生活環境」と表現）と性に関する「生活の質」（「性的生活の質」と表現）との関係を検討した。

「性的共生社会」を創造し、「性のノーマライゼーション化」を図っていくことが私たちに課せられているが、「性のノーマライゼーション化」を図るためには、次のような課題への検討が求められている。

- (1)知的障がいのある人は、どの程度ノーマルな性的生活環境を得ているか。
- (2)知的障がいのある人は、どの程度ノーマルな性的生活を送っているか。
- (3)知的障がいのある人は、どの程度「性的生活の質の向上」が図られているか。

これらの課題は、「知的障害のある人の性的生活の質をいかに高めるか」という課題に集約することができる。また、この課題は、「どうしたら知的障害のある人を取巻く性的生活環境が適切に整備されるか」というテーマを導く。このような点に留意しながら、「性のノーマライゼーション化」と「性的生活の質の向上」との関係を検討することにした。

「ノーマルな性的生活環境」を整備すると共に「機能性」「個別支援」「心理的前提条件」「地域住民の理解」といった四つの条件を適切に得ていくことで、「ノーマルな性的生活」を送ることができ、「性的生活の質の向上」が図られていくことができれば、「性のノーマライゼーション化」を図り、誰もが社会から平等に受け入れられ、一人ひとりが大切にされ、性的人間として生きることを可能にする「性的共生社会」を創造していくことができるのではないかと整理することができた。また、もし知的障害のある人に出会いの場を多様な形で用意し、性や結婚、家庭生活に関わるあらゆる支援が十分に行うことができる「性と対人関係支援室」のような部門を公的機関や社会福祉法人等に設置し、わかりやすく「性と対人関係」に関する情報を伝え（「機能性」）、「個別支援」や「心理的前提条件」「地域住民の理解」を得て、「性的生活の質の向上」を図ることができれば、「性のノーマライゼーション化」が達成されていくはずである。

「性と対人関係支援室」のような部門を通して、家庭や学校、就労の場において、生涯学習機関等と連携しながら継続的に「性に関する講座」を行うことができれば、知的障害のある人が性に関する情報を得、性に関する情報の整理をしながら、コミュニケーションの輪を広げていくことが可能となるはずである。

様々な社会 - 性的な取り組みや社会的努力を通して、「ノーマルな性的生活環境」の整備と「諸条件」が用意されれば、「性のノーマライゼーション化」を図り、共に生き、共に暮らし、「誰もが性的人間として生きる」ことを可能とする「性的共生社会」を創造していくことができるのではないだろうか。また、知的障害のある人の社会 - 性的支援にミクロ・メゾ・マクロの各レベルで何が必要とされるのかをも検討することができれば、「知的障害のある人のための社会 - 性的包括支援策」をも創出することができるのではないかと思われた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 河東田博	4. 巻 165号
2. 論文標題 知的障害のある人への社会的抑圧	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 110-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 166号
2. 論文標題 なぜ知的障害のある人は性的人間として生きることを奪われてきたのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 167号
2. 論文標題 誰もが性的人間として生きるために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 142-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 168号
2. 論文標題 誰もが性的人間として生きることへの道程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 130-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 169号
2. 論文標題 スウェーデンの性教育義務化の歩みから学ぶ性的共生	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 100-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 170号
2. 論文標題 スウェーデンのオープンな社会-性的文化環境と当事者用性教育テキスト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 108-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 66号
2. 論文標題 知的障害のある人の性に関する認知・理解と性教育	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 浦和論叢	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 171号
2. 論文標題 日本における知的障害のある人たちの性教育の実態	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 114-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 172号
2. 論文標題 知的障害のある人のための『性教育プログラム試案』作成に向けた検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 114-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 173号
2. 論文標題 知的障害のある人のための性教育実践に向けた検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 135-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 174号
2. 論文標題 誰もが性的人間として生きるために：性教育実践と性的共生への展望	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 99-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河東田博	4. 巻 57号
2. 論文標題 知的障がいと性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立教社会福祉ニュース	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 河東田博
2. 発表標題 障害のある人の性をめぐる歴史的・社会的実態と性の社会構築モデル
3. 学会等名 障害のある人におけるセクシュアリティに関する研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河東田博
2. 発表標題 知的障がいと性
3. 学会等名 立教大学社会福祉研究所研究例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 河東田博
2. 発表標題 誰もが性的人間として生きるために - 知的障がいと性
3. 学会等名 立教大学社会福祉研究所公開シンポジウム
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 河東田博	4. 発行年 2022年
2. 出版社 浦和大学（2021年度科学研究費報告書）	5. 総ページ数 141
3. 書名 知的障害のある人の性をめぐる社会的実態と性教育のあり方に関する研究	

1. 著者名 河東田博	4. 発行年 2023年
2. 出版社 浦和大学 (2022年度科学研究費報告書)	5. 総ページ数 187
3. 書名 知的障害のある人の性をめぐる社会的実態と性教育のあり方に関する研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関